シュプランガーにおける教員養成論の展開

西　村　正　登

Development of E.Spranger's Gedanken über Lehrerbildung

Masato NISHIMURA

(Received October 1, 2004)

1．問題の所在と研究方法

ドイツの国民学校教員養成に関する文献の中では、シュプランガー（Eduard Spranger, 1882-1963）をプロイセンに設立された教育アカデミー（Pädagogische Akademie）の精神的な父として、ベッカー（Carl Heinrich Becker, 1876-1933）をそれを政策的に実現した人物として位置づけ、さらに両者を第二次世界大戦後に設立された教育大学（Pädagogische Hochschule）の先駆者と見なすことが一般的な通説となっていた[1)]。

シュプランガー自身も自らを教育アカデミーと教育大学の精神的な創始者であることを自認していた。例えば、彼は1932年２月23日付のビュッヒャー（F.Bücher）への手紙の中で、教育アカデミーが自分の『教員養成論』に起源をもつものであると述べている[2)]。また、1961年１月29日付のアルトハウス（P.Althaus）への手紙の中で、自らを戦後設立された「教育大学の計画の創始者」[3)]と呼んでいる。

しかし、他の文献では、必ずしもシュプランガーは教育アカデミーと教育大学の創始者として位置づけられていない。例えば、ドゥリーシュ（J.von den Driesch）によって書かれた「プロイセン文部省の公的な覚え書」とベッカーの論文「ドイツ国民制度の再建における教育アカデミー」の中には、シュプランガーと教育アカデミーとの関係については一言も述べられていない[4)]。それは、シュプランガーとベッカーとの間に、教育アカデミーに対する基本的な構想の相違が存在していたためであろう[5)]。また、当時ワイマール共和国の教員養成の指導的な人物の１人であったリーケル（A.Riekel）は、大学の教員養成において教育アカデミーの精神的な父にふさわしいのはベッカーであり、けっしてシュプランガーの構想を実現したものではないと述べている[6)]。

このように最近のシュプランガー研究では、従来の一般的なシュプランガー理解を修正し、新しいシュプランガー像を発見していこうとする傾向が見られる。マイヤー・ヴィルナー（G. Meyer-Willner）は、従来のシュプランガー像を創り出した代表的な人物としてキッテル（H.Kittel）とレーブレ（A.Reble）の２人の名前を挙げ、彼らによって「神話的に美化されたシュプランガーの活動」を、文献に基づいて事実に即した解釈に訂正し直すことの必要性を主張している[7)]。

以上のような観点から、本研究では、従来公刊されてきた著書や論文等に加えて、シュプランガーが残した未公刊の書簡類や覚え書等を研究資料として活用した。現在、これら多くのシュプランガーに関する文献は、コブレンツの連邦文庫に保管されている。また、ベルリン・ダーレムにある内閣官文書保管室には、ベッカーとグリメ（A.Grimme）の遺稿がたくさん保管さ

れており、シュプランガーとベッカーとの関係を探るための貴重な資料を提供してくれる。筆者は本研究を進めていくにあたって、これらの文庫から必要な文献を取り寄せて活用した。

とりわけ、シュプランガーは、生涯にわたって膨大な数の書簡を残している。ハンス・バルター・ベーア（H.W.Bähr）は、シュプランガーが文通していた相手から4200以上の手紙を集めることに成功し、その中から重要な書簡を精選し、シュプランガー著作全集第７巻「書簡集」を編集した。公刊された著書や論文と個人的な書簡の中に表現されている内容には大きな隔たりがあり、一方だけを研究資料として活用することは一面的な理解に留まる恐れがある。そこで本研究では、これまで公刊されてきた著書や論文等に加えて書簡類等を合わせて活用し、公私の両面から新しいシュプランガー像を発見していくように努めた。以上のような研究方法によって、本稿では次の３点を明らかにしていきたい。

① シュプランガーの『教員養成論』は、ドイツのどのような時代背景の中で生み出されたのか。

② 従来シュプランガーとベッカーは、良好な人間関係の中で互いに協力してプロイセンの教育アカデミーを設立したものと考えられてきたが、実際には２人の関係はどのように進展していったのか。

③ シュプランガーは、プロイセンの教育アカデミー設立にどの程度関与していたのか。

２．シュプランガーとベッカーとの関係分析

(1) シュプランガーとベッカーの教員養成論の相違とベッカーの第一の転向

シュプランガーの教員養成論の形成過程とその後の展開について考察する場合、ベッカーはその鍵を握る重要な人物である。なぜなら、両者はプロイセンの教員養成について度々意見や書簡を交わしながら対立と合意を繰り返し、ワイマール期の教員養成改革に重要な役割を演じたからである。そこで本稿では、２人の人間関係の進展を辿りながら、1926年にプロイセンの教育アカデミーが設立されるまでの経緯を探っていきたい。

ベッカーの大学改革構想は、彼の「大学改革論」の中に述べられている。彼はその中で、「総合大学は工科大学と他のすべての大学を再び連合する。……しかし、さらにすべての新しい専門大学に対する容赦のない戦いを行う。専門化ではなく、連合という標語が唱えられなければならない」[8] と述べている。

また、ベッカーは1919年５月の国家経済委員会に対して行った総合大学改革についての講演の中で、自らの総合大学構想について説明している。それによると、彼は教員養成の前段階として新しい学芸学部（Artistenfakultät）を創設することを提案し、「この学部には国民学校教員も通うことができるであろう」[9] と述べている。彼によれば、「それ（学芸学部）は、まず第一に人間を一般教養人に形成するために通う学部」[10] であり、「その際、原則的には１つの学部だけに耳を傾けるという原則が破られなければならない」[11]。なぜなら、「その原則は、論理的な演繹法によって弁護し得るという過去の画一主義であり、実践の必要性を押しのけるものである。すなわち、学部は一定の実践的な目的のために共に結実するものに他ならないはずである」[12] からである。

次にベッカーは、学芸学部には、これまで総合大学の中で学問的な講義を行ってきたような優れた教員が必要であることを主張している。しかも彼は、「学部の構成は実践的な必要性によって規定されなければならない。そしてこのことは、多くの場合１人の教授がいくつもの学部に所属することを要求する」[13] と主張している。このように、元々彼は国民学校教員養成を総合

大学から分離して実施するよりも、統合の道を探ることを目指していた。

ところが、ベッカーは自らの大学改革構想に確信をもっていたわけではなかった。そこで彼は、1919年９月初めに開催される予定の国際大学会議に備えて、シュプランガーに助言を求めている。これに対してシュプランガーは８月25日に手紙を書き、それまで国民学校教員養成を総合大学の中で実施しようと考えていたベッカーに、その考えを改めるよう示唆している。シュプランガーは当時のザクセンの教育状況について、「大臣は政党の秘書であり、文部省は今日総合大学をまったく知らない国民学校教員の要求に多くを依存しています」[14] と述べて、プロイセンがザクセンのようにならないためには、政党や国民学校教員の干渉や要求から独立した大学の強い自治運営能力を必要とすることを主張している。

その後シュプランガーはベッカーと一緒に昼食をとる機会があったが、その時の様子について1919年９月28日付のハートリヒ[15] への手紙の中で次のように述べている。「私はベッカーと一緒に昼食をとりました。その時、『国民学校教員が（総合大学へ）殺到することに対してわれわれを援助して下さい。問題は高等教育の戦いです』という（ベッカーの）決定的な言葉が聞こえてきました」[16] と。すなわち、この時ベッカーは、総合大学の中で国民学校教員養成を行うという自らの見解を突如変更し、逆に国民学校教員志望者が総合大学の中へ多数入学してくることに対する対策をシュプランガーに提供してほしいと援助を申し出てきたのである。これがベッカーの第一の転向である。

その約１か月後の1919年10月20日から22日にかけて行われた文部省の会議では、第一次世界大戦後の財政的な理由から、国民学校教員養成を総合大学で統一的に実施することを中止する提案がなされている[17]。したがって、このベッカーの突然の転向によって、総合大学以外の機関で国民学校教員養成を行うというシュプランガーの構想が実現される可能性が出てきたわけである。この時点で、彼は自分の強力な支援者が出てきたことを確信していた。

当時シュプランガーは、中央研究所での一連の議論の中で、国民学校教員との戦いが容易ならないことを身にしみて感じていた[18]。したがって、彼は総合大学で国民学校教員養成を行うという国民学校教員の要求にある程度叶い、しかも総合大学の学問的レベルを低下させないために総合大学以外の機関で国民学校教員養成を行うという自らの草案創りに着手しなければならなかった。そこで、彼は1919年10月26日付のベッカーへの手紙の中で、「ここでは新しい響きのよい標語を活用することほど助けになるものはありません。私はそれと平行して小著の出版を計画しています（神よ時間を与え賜え）。それは恐らくあなたが他の方向へ転換することを容易にするあなたのためのもので、クエーレ・ウント・マイヤー社から出版されます」[19] と述べ、ベッカーが誤った方向へ走らないように警告している。こうして、「新しい響きのよい標語」とそれを理論的に根拠づけるための著作が必要になった。それが「教育者養成大学(Bildnerhochschule)」[20] という標語と『教員養成論』である。

しかし、ベッカーの方向転換は、それほど確かなものではなかった。彼はシュプランガーから送付されてきた『教員養成論』を読んだ後、1920年１月３日に御礼の手紙を返送し、次のように述べている。「私は基本的な見解をあなたと完全に共有しています。あなたは陶冶の問題を私に直接理解できるしっかり整理された形に体系化されています。……とはいいながら、私はこの３組みの課題が３つの大学類型に対応しなければならないというあなたの結論に必ずしも従うことができるわけではありません」[21]。このように述べた後ベッカーは、２人の教員養成に対する根本的な見解の相違が、その出発点に由来していることを指摘している。

それは、ベッカーが職業陶冶の中に一般陶冶を導入し、職業陶冶と一般陶冶を統合しようと

したのに対して、シュプランガーは職業陶冶と一般陶冶の性格を明確に区別することによって、両者を別々に深化しようとした点である。具体的には、シュプランガーは職業陶冶を国民学校教員養成のみに限定し、ギムナジウム教員養成には適用していない。換言すれば、彼はギムナジウム教員養成については従来通り総合大学で一般陶冶のみによる養成を行い、国民学校教員養成のみを教育者養成大学で一般陶冶と職業陶冶を統合したカリキュラムで実施しようと考えたのである。これに対してベッカーは、国民学校教員養成もギムナジウム教員養成と同様に、総合大学の中で一般陶冶と職業陶冶を統合して行うべきであると考えた。したがって、２つの教員養成を分離して別の機関で実施しようとするシュプランガーの見解は、ベッカーには理解し難いものであった。

シュプランガーは、国民学校教員養成とギムナジウム教員養成が「等価値（gleichwertig)」ではあるが「同じ種類（gleichartig)」ではないと考え、異なった目的と性格を有する別の機関で養成すべきことを主張した[22]。なぜなら、実践的な力量をもった教員を養成することを目的とした国民学校教員養成は、純粋な学問研究を目的とした総合大学で養成するには不十分であるし、相応しくないと考えられたからである。また、異質な特色をもつ２つの教員養成を混合し、同じ総合大学で養成することは、両方の固有性を共に喪失させることに他ならないと考えられたからである。統合よりも分離が、彼の教員養成に対する基本的な考え方であった。

これに対してベッカーは、分離よりも統合の道を優先した。それは理論的には一般陶冶と職業陶冶の統合であり、制度的には国民学校教員養成とギムナジウム教員養成との統合であった。しかし、２つの教員養成を共に総合大学で行うには、第一次世界大戦後の敗戦による財政的な困難が伴い、実施することが不可能であった。そこでベッカーは、国民学校教員養成を総合大学以外の機関で行うための理論的な根拠が必要となり、その援助をシュプランガーに求めてきたのである。その結果生み出されたのが『教員養成論』であったが、ベッカーはそれを読んでシュプランガーとの見解の相違を改めて痛感したのである。

シュプランガーはベッカーからの手紙を読んだ後、ベッカーがもはや長い間彼の味方ではあり得ないことを確信した。彼は1920年１月６日、ベッカーへの返信の中で次のように反論している。「一般に私は、常に陶冶の過程、とりわけ職業陶冶の過程を混合したり、曖昧なものにすることに反対します。それは統一学校思想の不健全な後続現象です」[23] と。すなわち、彼は統一学校運動の平等思想によって職業陶冶が一般陶冶と混合され、両方とも固有性が失われることを危惧した。それは彼にとって、とりも直さず国民学校教員養成が総合大学の中で実施されることによってその固有性を失い、国民学校教員養成も総合大学も共に破滅への道を歩んでいくことに他ならなかった。

シュプランガーはその手紙の最後の段落で、「尊敬する文部次官殿、最も大切なことをもう一度繰り返すことをお許し下さい」[24] と述べた後、国民学校教員団に対して「教育者養成大学」という影響力の強い新しい標語を投げかけ、根本的な政策の転換を図ることが絶対に必要であることを強調している。そして、その後の２か月間にその標語を活用するかどうかがベッカーの手に握られており、もし活用されない場合には、総合大学と国民学校は同時に衰退し、それぞれが決定的な核心をもつことなく教員養成の形が形成されていくことになるであろうと警告している。

シュプランガーは同日の１月６日にハートリヒにも手紙を書いている。彼はその中で、１月３日付のベッカーからの手紙を自分への「エネルギッシュな説教」[25] と呼び、ベッカーが文部省内のシュプランガーの論敵カールシュテット（O.Karstädt）の影響で、彼に公然と反対の手

紙を出すまでに心を動かしていると報告している[26]。

(2) ベッカーの第二の転向

1920年1月に『教員養成論』が出版されて広く人々の眼に行きわたるようになると、その著書は一転して非難の対象となり、国民学校教員団はシュプランガーに対して反対勢力を結集するようになっていった。殊にその1月末にキューネル（J.Kühnel）の反対論文[27]が提出されると、事態はどん底状態になった。以前からシュプランガーと激しく対立していたライプツィヒ教員連盟は、シュプランガーの論敵ともいえるキューネルの反対論文をその機関誌の中で絶賛し、四面楚歌の状態に陥ったシュプランガーは、精神的な打撃を受けて病に罹ってしまう。

このような時にベッカーから届いた突然の手紙は、シュプランガーにとって天からの贈り物のように思われたに違いない。ベッカーはその手紙の中で、キューネルの反対論文を読んだ後その内容に失望し、突然シュプランガーの方に方向転換したことを記していた[28]。これがベッカーの第二の転向である。ベッカーはキューネルの反対論文が、「非常に客観性のない偽りの道」[29]へと導いていることを残念に思い、その「偽りの論文が、あなたの精緻に考察された、結果として非常に意識的な戦略へと繋がる論文よりも、この差し迫った不幸に対する眼を私に開いてくれました」[30]と記していた。この手紙の中に述べられている「あなたの精緻に考察された、結果として非常に意識的な戦略へと繋がる論文」とは、もちろん『教員養成論』のことを指しており、ベッカーはこの論文の中に国民学校教員養成に対する戦略的な意図が隠されていることをすでに見抜いていたことを示している。

プロイセンでは一般に、高等学校正教諭（Oberlehrer）になるためには、総合大学での最低4年間の理論的は学習と2年間の教育実践を必要とすると考えられていた。ところが、キューネルはその論文の中で、それらをすべて含めて3年間で達成しようと考えていた。ベッカーはこのようなキューネルの無謀ともいえる教員養成の方法が、従来行われてきた最悪の教員養成の方法よりも劣ると考えて失望した。

ベッカーは、理念的にはすべての教員階級に開かれた総合大学での教員養成を理想としながらも、第一次世界大戦後の財政的な困難に直面し、シュプランガーに国民学校教員団に対抗するための理論的な援助を求めざるを得なくなったのである。このあたりに、文部次官として教育行政に直接携わる者の苦悩と、彼の変わり身の速さを見て取ることができる。しかも、ベッカーはその手紙の最後の部分でシュプランガーを「戦友（Kampfgenosse）と呼び、今後共に手を結んでいくことを誓っている[31]。

3．全国学校会議でのかけひき

1920年6月11日から19日にかけて全国学校会議が開催されたが、この会議はシュプランガーにとって『教員養成論』の出版によって失われた名誉を挽回する絶好の機会であった。すでに彼は1920年4月から母校ベルリン大学の哲学ならびに教育学の教授に就任し、精力的な活動を開始していた。しかし、『教員養成論』が世間の不評を買っていることは気がかりの種であった。ライプツィヒ教員連盟の厳しい攻撃とキューネルの論駁書は、彼に一時全国学校会議に出席しない決意をさせる程の精神的な打撃を与えていた[32]。それでも彼は、全国学校会議を自分が今直面している教員養成の問題を打開する唯一の機会であると考え、また前述したベッカーからの手紙にも励まされて再び気持ちを取り直し、十分作戦を練った上で会議に臨んでいったのである。

シュプランガーは会議を円滑に進めていくために会議の直前にベッカーに会い、事前の打ち合わせをすることを提案し、ベッカーもこれを承諾している。ところが、1954年８月５日付のシュプランガーからヴェンデ（E.Wende）への手紙によると、ベッカーはこの会議で提案する予定の新しい構想の腹案をもっていながら、この事前の話し合いでシュプランガーに何も伝えていない[33]。そのためにシュプランガーは、プロイセン文部省がその会議で達成しようとしていた目的を知らないまま会議に臨まなければならなかった。彼はこのことを同じ手紙の中で、「それ以来ベッカーと私との間には、軽い緊張関係がが存在していました」[34]と記している。シュプランガーは、この時ベッカーが新しい教員養成を青年運動とその精神の上に基礎づけようと構想していたことを後から聞き知っている[35]が、この時のベッカーのシュプランガーに対する態度は、２人の間に新たな溝を形成する原因となった。こうして、全国学校会議でベッカーを背後から援護しながら協力しようと考えていたシュプランガーの期待は裏切られ、彼は会議の中で孤立し、他の協力者を捜さなければならない立場に立たされた。

全国学校会議の様子は、「1920年６月11日から19日に行われた全国学校会議への私の参加」というタイトルでシュプランガーによって記録されているので、次にこの記録に基づいて会議の経過やその舞台裏について述べていきたい。

シュプランガーは会議の前日の6月10日、２つの協議に出席している。１つは大学で養成された教員との協議であり、彼はこの協議に出席することによってできるだけ多くの教員を自分の味方につけようと努めている。その日の夕方、彼はまた大学の代表者たちを予備会議を開いて勧誘し、国民学校教員養成が総合大学で行われるようになると、総合大学の将来は危機に晒されるようになるので、大学教授はこれに対して責任意識を持たなければならないと講演している[36]。このように、彼は会議の前日から周到に準備し、会議が有利に展開するよう配慮している。

シュプランガーによれば、会議の第１日目は各陣営が互いの立場を主張し合い、激しい論戦を展開し、痛ましい階級闘争が繰り広げられた。彼は会議の間の休憩時間にヨハネス・テヴス（J.Tews）と会話しているが、その時テヴスは、この会議で国民学校教員団がシュプランガーを味方から失ったことを残念に思い、シュプランガーが国民学校教員団にとって疎ましい存在になったことを後世教育史に刻まれることになるであろうと話している。これに対してシュプランガーは、「どんな場合にも、物事はある社会的偏見から生じるものではなく、国民教育に必要とされるものについての最も内面的な確信から生じるものです。ですから私たちは友人として別の道を進みましょう」[37]と応えている。このように、シュプランガーにとって第１日目は不毛な階級闘争に終わり、満足のいくものではなかった。

第２日目は、午前中にハルナック（A.Harnack）がシュプランガーの『教員養成論』の立場に基づいて基調講演を行っている。その後、シュプランガーは午後ほとんどの国民学校教員を第２室に集めることに成功している。彼はこの会議の中で、「少し戦略的な予備会議を行った後、私は誰か私の意見に反対して教育学部に賛成する気持ちがあるかどうか直接尋ねた」[38]と述べている。これに対して多くの反対意見が出され、特にユダヤ人の会員から強力な反対意見が提出された。しかし、シュプランガーはこの反対意見に対して怯むことなく自分の意見を主張し、国民学校教員に対してある程度効果的な影響を与えることができたと感じている。彼はその日の会議の様子について、「ブランディー（K.Brandi）は私の努力に感謝し、論敵の一部は私におべっかを使い、その結果、私は根本において彼らが意見を異にするものではないことを確信した」[39]と述べている。このように、シュプランガーにとって第２日目の会議は、か

なり満足のいくものであった。

第４日目の６月14日、シュプランガーは教員養成問題部会で基調講演を行ったが、この講演はこの会議での成否を決定するほどの重要な意味をもっていた。基調講演はかなりの程度成功を修め、ほとんどの出席者から賞賛をあびる結果となった。ベルリン大学哲学部長のトレルチ(E.Troeltsch) とベッカーはこの講演を絶賛しているし、コネフケ（G.Koneffke）のような厳しい批評家でさえ、「シュプランガーは国民学校教員団を極めて大きな影響力をもって巧みに操った。彼の講演は傑作であった」[40] と絶賛している。彼はこの基調講演の中で、学歴は人間の価値を決める決定的なものではないということから出発し、総合大学と教育者養成大学は性質は異なっているが同等の価値をもつものであることを主張し、総合大学とは別の課題を有する国民学校教員養成のための特別な大学を設立することの必要性を巧みに導き出している。すなわち、純粋な学問研究を目的とする総合大学でもなく、技術者の養成を目的とする専門大学でもなく、全人的な国民学校教員養成を目的とした第三の大学―教育者養成大学設立の必要性を力説したのである。

こうしてシュプランガーは、この基調講演である程度の成功を修めることができたが、国民学校教員は心底からそれを納得したわけではなかった。総合大学内に教育学部を設置し、そこで国民学校教員養成を行うという彼らの長年の要求には根強いものがあり、それほど簡単に自分たちの要求を引き下げるわけにはいかなかった。

審議の結果を受け、第６日目に国民学校教員養成についての投票が行われているが、シュプランガーによれば、「投票の結果、教育学部（勝利）と教育大学（敗北）は否決された」[41]。すなわち、彼にとって、総合大学の中に教育学部を設置することが否決されたことは、かねてからの思惑通り勝利を意味していたが、教育大学の否決は『教員養成論』以来主張してきた総合大学以外の独立した大学で国民学校教員養成を行うという彼の見解が承認されなかったことになり、敗北を意味していた。

シュプランガーは９日間にわたる全国学校会議を総括して、「その会議は教員養成制度の分野で、150年の仕事の成果を破壊してしまった。それは何か新しいものを提案することはなかった」[42] と述べている。会議の中を支配していた全体的な傾向は、国民学校教員養成もギムナジウム教員養成と同様に総合大学の中で実施すべきであるという意見が大勢を占めており、シュプランガーは当初の目的を達成することはできなかった。それでも彼はこの会議報告書の最後で、「大学教官の仲間の中で、私の個人的な影響力はこの会議によって著しく増大した。議事録は、私がすべての教員養成問題の中心に立っていたことを記録するであろう」[43] と述べて、自己自身の全国学校会議での奮闘ぶりを自負している。

４．ベッカーの第三の転向

全国学校会議以後、シュプランガーとベッカーとの関係は一時冷却した関係になっていたが、1921年10月31日付のベッカーからの手紙によって交流は再開された。ベッカーはこの手紙の中でシュプランガーの教員養成の立場に賛成の意向を示し、協力を要請している。これがベッカーの第三の転向である。このようなベッカーの度々の転向にもかかわらず、シュプランガーはこの時もそれを素直に喜び、新たに大学で教育学を担当する教員を養成するための機関として、科学的教育学研究協会の設立計画を提案している。

その後両者の関係は次第に回復し、しばらくの間良好な人間関係が続いていく。シュプランガーは1922年５月12日付のハートリヒへの手紙の中で次のように記している。「先週の土曜日、

文部省のベッカーのところでお茶を飲みました。私たちはハインリッヒ・シュルツと興味深い話し合いをしました。私は彼の学校政策の核心を一瞥しました。私たちはそれほど遠くには立っていませんし、彼はライプツィヒ教員連盟に対して私と同じように考えています。ベッカーも同様です。ですから、ドイツ教員連盟は孤立しています」[44]。また、1922年10月23日付のハートリヒへの手紙には、「私は午後、文部省でベッカーと十分な時間話し合いました。私たちは今、私が提案した意味で教員養成の形態について意見が一致しています（ですから、文部大臣[45]も意見が一致しています)。しかし、大蔵大臣はこの計画にけっして賛成しようとはしません。彼は国民学校教員のアビトゥーアをけっして承認しようとはしません」[46] と記している。

これら２つの書簡から読み取れるように、この当時シュプランガーとベッカー、シュプランガーとプロイセン文部省との関係は、非常に友好的なものであった。教員養成に関しても、シュプランガーと文部大臣のベーリッツ（O.Boelitz)、文部次官のベッカーはほぼ意見が一致し、話し合いは円滑に進んでいった。ただ、財政を管理する大蔵大臣は、国民学校教員を大学で養成することに難色を示した。当初から総合大学での国民学校教員養成に終始反対していたシュプランガーにとって、このプロイセン政府の決断力と実行力のなさは、極めて好都合であった。結局、政府は財政的な理由から総合大学での国民学校教員養成を断念し、シュプランガーが提案したように総合大学から独立した大学での国民学校教員養成を模索せざるを得なかった。

５．プロイセン教育アカデミーの設立

シュプランガーとベッカーとの良好な人間関係は、それほど長くは続かなかった。1923年1月と２月の文通以後、２人の間の往復書簡が突然とだえている。その後、1924年５月25日、シュプランガーはハートリヒへの手紙の中で次のように記している。「ベッカーは、すべての会議で議長として、おべっか使いの剣士のように振る舞いました。（私は彼に）極めて好ましくない印象を受けました。彼は本当にそれほど判断力がないのでしょうか。彼は義務に忠実な官吏としてのみ弁明するのでしょうか。……ベッカーについていえば、それはまるでくらげをつかむかのようです」[47]（傍点シュプランガー)。この手紙の中には、終始一貫した信念に基づいて行動しないベッカーに対するシュプランガーの不信感が読み取れる。それは、それまで状況に応じて何度も自分の立場を変更してきた１人の人間としてのベッカーに対する彼の不信感の表明でもあった。

1925年２月初めにベッカーが文部大臣に昇格すると、２人の関係はさらに険悪になっていった。それまで文部次官の地位にあったベッカーは、文部大臣ベーリッツの指示に従って行動していたが、自らが文部大臣の地位につくと、自分の意志でプロイセンの教育行政に取り組むことができるようになった。ベッカーは文部大臣就任後、廃止された教員養成所の教員を一時免職させる措置をとっているが、シュプランガーは新聞記事の中でこの措置に反対することを表明し、1925年３月13日「長い間心の中で吟味した後」、「良心に抵触する」のを感じ、２月６日の勅令に対して公に反対の立場をとることをベッカーに宛てた手紙の中で書いている。また、彼はこの中で、「誰かが新聞記事に書くことを自分に勧めたのではなく、彼の「自由な行動から行った」ことも強調している[48]。そのためにシュプランガーは、前文部大臣のベーリッツの力を教員養成改革のために動因しようとしたが、そのことが２人の関係をさらに悪化させた。

シュプランガーは、彼の再三再四の注意や警告に耳を傾けようとしないベッカーについて次のように述べている。「教員養成所は解体される。それと同時に、大部分の価値ある文化は排除される。私たちが久しい以前から性急に待ち望んでいる新しいものは、どこに存在している

のであろうか。あるいは、ドイツ国民のこの運命の年にあって、将来の国民教育がどのようになるかはどうでもよいのであろうか。今まさに、ドイツの教育のこの重要な部分を休止することができるのであろうか。国民教育のためのプロイセンの文部大臣が、再三再四注意し警告する声を聞き流すことはできない。それは今日重要な問題である。遅れると危険である！」[49]。しかし、このようなシュプランガーのベッカーへの警告は何の効果もなかった。

ベッカーは文部大臣に就任してまもなく、中央研究所で会議を開催し、関係者を招いて青年運動と将来の教員養成の関係について討議した。この会議の基調講演はクラット（F.Klatt）が行ったが、彼は青年運動の代表者として、計画することのできる教員養成の形態や内容を青年運動の精神から導き出すよう努力した。しかし、その後グァルディーニ（R.Guardini）が講演を行い、クラットの講演に対して鋭い反論を行った。シュッフハルト（W.Schuchhardt）は、その時の様子を次のように述べている。「シュプランガーは、確かな基準をもったこの講演に明らかに魅了されていた。彼はこれ見よがしにグァルディーニのところへ行き、彼と握手をしたが、私たちはこれに大変驚いた。なぜなら、それは本来私たちが考えていることだと思うからです」[50]と。この場合、シュプランガーがグァルディーニと握手をしたかどうかはそれほど重要な問題ではない。むしろ重要なのは、彼がグァルディーニと握手をするという示威的な行為によって、教員養成を青年運動とその教育精神の上に基礎づけようとするベッカーの意図をはっきりと拒絶しようとしたことである。シュプランガーは、ベッカーが主催したこの会議を「教育の謝肉祭（pädagogischer Karneval）」[51]と呼んで皮肉っている。

こうして両者の決裂は、修復しようのないものとなっていった。1925年９月24日と25日の両日、教育アカデミーを設立するための決定的な会議が開かれているが、シュプランガーはこの会議に招待されていない[52]。また、ベッカーはこの頃完全に決定した教育アカデミーの計画書をすでに所有していた[53]し、教育アカデミーが誕生する証拠書類となるドゥリーシュによって書かれた覚え書[54]はシュプランガーに送付されていない。シュプランガーは、1925年８月23日付のケルシェンシュタイナー（G.Kerschensteiner）への手紙の中で、「あなたは教員養成に関するプロイセン文部省の新しい覚え書をすでにご覧になりましたか。それは私には送付されてきませんでした。私が気分を害していることがあなたにはおわかりでしょう」[55]と記している。

以上の事実から、シュプランガーがプロイセンの教育アカデミー設立に直接関与していなかったことが明らかになってきた。教育アカデミーの設立は、直接にはベッカーとドゥリーシュによるものであり、それが設立された時点では、シュプランガーは直接関与していなかったのである。

その上、シュプランガーが構想していた教育アカデミーとベッカーによって実際に設立された教育アカデミーとの間には、表１のような相違が存在していた。両者に共通する点は、国民学校教員養成を行う場所だけである。すなわち、ベッカーも最終的には教育アカデミーという総合大学から独立した機関で国民学校教員養成を実施しようとした点ではシュプランガーと共通している。その意味では、シュプランガーが1920年に『教員養成論』の中で提唱した教育者養成大学の構想が、1926年に教育アカデミーとして実現されたものとも考えられる。しかし、ベッカーがシュプランガーと国民学校教員団の主張の間を揺れ動きながら最終的に教育アカデミーの形を選択したのは、むしろ大蔵省が財政的な理由から総合大学内での国民学校教員養成に反対したことと、総合大学自体が国民学校教員養成を行うという国民学校教員団の要求を何度も拒否したことによるものであった。その際、シュプランガーの教員養成論は、総合大学か

表1　シュプランガーが構想していた教育アカデミーとベッカーによって設立された教育アカデミーの相違

	シュプランガー	ベッカー
在学期間	3年	2年
教育の立場	従来の教員養成所を継承しながら改善する立場	大学での一般教育を重視する立場
授業時数	1学期で22週時間	1学期で36週時間
教育内容	本質的な教育内容に重点を置いた学習	国民学校の教科のすべての学問領域を学習
理論と実践との関係	専門的研究と教授学的−方法的な養成の分離	専門的研究と教授学的−方法的な養成の統一
宗教	宗派別のアカデミー	宗派共同のアカデミー

ら独立した国民学校教員養成機関を設立するための理論的根拠として利用された。

6．結　語

以上、シュプランガーとベッカーとの関係を基軸にしながら、プロイセンの教育アカデミーが設立されるまでの経緯について述べてきた。

シュプランガーが、総合大学での国民学校教員養成を実現しようとする国民学校教員団の強い要求に対して、何とかそれを阻止しようと努めたことは、全国学校会議における彼の巧みな戦略やベッカーに対して教育者養成大学設立の必要性を説く彼の努力の中によく現れている。しかし、彼の努力は、教育アカデミーの設立には直接関与していなかった。彼の教育アカデミーへの影響力は、ベッカーとの関係が疎遠になるに従って弱くなり、教育アカデミーが設立された時点では、彼の構想はほとんどその中に生かされていなかったのである。

とはいえ、シュプランガーが『教員養成論』の中で総合大学から独立した国民学校教員養成機関として教育者養成大学の設立を提唱し、その後も全国学校会議やプロイセン文部省との交渉を通して間接的に教育アカデミーの設立に関与したことは否定できない。

また、シュプランガーとベッカーとの関係は、従来の通説のようにけっして良好な協力関係ではなく、何度も紆余曲折を繰り返しながら進展し、個人的な信頼関係に至ることはなかった。ベッカーは、プロイセン文部省、ドイツ教員連盟、総合大学などの動きを眺めながら、教育行政官として状況に応じて取るべき措置を決定した。このようなベッカーの行動の仕方は、教員養成に対して常に終始一貫した姿勢を貫こうとするシュプランガーから見れば、自己自身の主義主張をもたない、掴みどころのない「くらげ」[56] のような行動に映ったに違いない。状況の変化に応じて度々方向転換するベッカーの変わり身の速さは、シュプランガーにとって人間として信頼するに足りないものであった。

以上の考察から、本稿では次の諸点が明らかになった。

① シュプランガーの『教員養成論』における教育者養成大学構想は、ワイマール憲法制定下の政治的背景の中で生み出された。それは、総合大学内での国民学校教員養成を実現したいという国民学校教員団の強い要求と総合大学の学問的レベルを低下させないために、総合大学以外の機関で国民学校教員養成を実施したいというシュプランガー自身の願望の間で生み出された妥協の産物であった。

② 従来、シュプランガーとベッカーは良好な人間関係の中で互いに協力してプロイセンの教育アカデミーを設立したものと考えられてきたが、２人の関係は何度も紆余曲折を繰り返しながら進展し、最後まで個人的な信頼関係に至ることはなかった。

③ 従来、シュプランガーはプロイセンの教育アカデミーの精神的、理論的な生みの親であり、ベッカーはそれを政策的に実現した人物であると考えられてきたが、1926年にそれが設立された時点では両者の人間関係は悪化し、シュプランガーは教育アカデミーの設立に直接関与していなかった。

＜注＞

1）G.Meyer-Willner:Eduard Spranger und die Lehrerbildung. Die notwendige Revision eines Mythos, Verlag Julius Klinkhardt,Bad Heilbrunn, 1986, S.215.
2）E.Spranger:Gesammelte Schriften（以下、GS. と略記）Bd.7, S.145.
3）Brief von E.Spranger an P.Althaus vom 29. 1. 1961.（BAK）
4）G.Meyer-Willner:a.a.O.,SS.216-217.
5）ibid., S.217.
6）A.Riekel:Die Akademische Lehrerbildung, 1931, 2.Aufl., S.5 und S.54.
7）G.Meyer-Willner:a.a.O., S.19.
8）C.H.Becker:Gedanken zur Hochschulreform, Leipzig, 1919, S.8.
9）Rep.92 Becker 1011, S.14.（GSAB）
10）ibid., S.14.
11）ibid., S.14.
12）ibid., S.14.
13）ibid., S.15.
14）Rep.92　Becker 4855.（GSAB）
15）ケーテ・ハートリヒは、ハイデルベルクに住むシュプランガーより10歳年上の医師の娘で、彼のよき理解者であった。２人の間には1903年からハートリヒが亡くなった1960年まで57年間にわたって文通が行われ、シュプランガー研究の貴重な資料となる多数の往復書簡が残されている。
16）Brief von E.Spranger an K.Hadlich vom 28. 9. 1919.（BAK）
17）R.Weber:Die Neuordnung der Volksschullehrerausbildung im Preußen der Weimarer Republik, 1982, S.245f.
18）Brief von E.Spranger an K.Hadlich vom 28. 9. und 8. 10. 1919.（BAK）
19）Rep.92　Becker 4855.（GSAB）
20）シュプランガーは『教員養成論』の中で、国民学校教員養成を行うための専門的な大学として教育者養成大学を創立することを提唱している。彼は総合大学を純粋な学問研究機関と考え、そこで国民学校教員養成を行うことに反対した。そして、総合大学から独立した国民学校教員養成のための大学を創立することを主張し、それを Bildnerhochschule と名づけた。横溝政八郎訳の『教員養成論』（日本教育大学協会、1959年）には、それは「教育大学」と訳されているが、第二次世界大戦後にドイツの各州に設立された Pädagogische Hochschule との相違を明確にするために、本稿では Bildnerhochschule を教育者養成大学と訳し、戦後設立された Pädagogische Hochschule を教育大学と訳して区別

した。

21) Rep.92　Becker 4855. (GSAB)
22) E.Spranger:Gedanken über Lehrerbildung, 1920. In:GS.Bd.3, S.68.
23) Rep.92　Becker 4855. (GSAB)
24) Rep.92　Becker 4855. (GSAB)
25) Brief von E.Spranger an K.Hadlich vom 6. 1. 1920. (BAK)
26) Brief von E.Spranger an K.Hadlich vom 6. 1. 1920. (BAK)
27) J.Kühnel:Gedanken über Lehrerbildung. Eine Gegenschrift, Leipzig, 1920.
28) G.Meyer-Willner:a.a.O., S.258.
29) Rep.92　Becker 4855. (GSAB)
30) Rep.92　Becker 4855. (GSAB)
31) G.Meyer-Willner:a.a.O., S.260.
32) Brief von E.Spranger an K.Hadlich vom 4. 2. 1920. (BAK)
33) Brief von E.Spranger an E.Wende vom 5. 8. 1954. (BAK)
34) Brief von E.Spranger an E.Wende vom 5. 8. 1954. (BAK)
35) G.Meyer-Willner:a.a.O., S.269.
36) E.Spranger:Meine Beteiligung an der Reichsschulkonferenz.11.-19. Juni 1920. In:F.H.Paffrath: Eduard Spranger und die Volksschule, 1971, S.226f..
37) ibid., S.227.
38) ibid., S.228.
39) ibid., S.228.
40) G.Koneffke:Die Reichsschulkonferenz von 1920. In:H.J.Heydorn/ G.Koneffke:Studien zur Sozialgeschichte und Philosophie der Bildung, München, 1973, Bd.2, S. 267.
41) E.Spranger:Meine Beteiligung an der Reichsschulkonferenz.11.-19. Juni 1920. In:F.H.Paffrath: a.a.O., S.230.
42) ibid., S.232.
43) ibid., S.232.
44) Brief von E.Spranger an K.Hadlich vom 12. 5. 1922. (BAK)
45) 1921年11月５日から1925年１月６日まで、プロイセンの文部大臣はオットー・ベーリッツであった。
46) Brief von E.Spranger an K.Hadlich vom 23. 10. 1922. (BAK)
47) Brief von E.Spranger an K.Hadlich vom 25. 5. 1924. (BAK)
48) Rep.92　Becker 4855. (GSAB)
49) E.Spranger:Die “höhere Bildung”, 1924, S.190.
50) W.Schuchhardt:Begegnungen mit Adolf Reichwein.In:Huber/ Krebs/, 1981, S.50.
51) Brief von E.Spranger an K.Hadlich vom 18. 2. 1925. (BAK)
52) Vgl. Rep.92　Becker 1184. (GSAB)
53) Vgl. z.B. Rep.92　Becker 1189, 1191 und 1202. (GSAB)
54) J. von den Driesch:Die von von den Driesch verfaßte Denkschrift. In:H.Kittel (Hrsg.):Die Pädagogischen Hochschulen. Dokumente ihrer Entwicklung (1) 1920-1932, Weinheim, 1965.

55) L.Englert (Hrsg.):Georg Kerschensteiner-Eduard Spranger, Briefwechsel 1912-1931, Oldenbourg, München, Wien, Stuttgart, 1966, S.219.
56) Brief von E.Spranger an K.Hadlich vom 25. 5. 1924. (BAK)

(　) 内の BAK はコブレンツ連邦文庫 (Bundesarchiv Koblenz) を、GSAB はベルリン・ダーレムにある内閣官文書保管室 (Geheimes Staatsarchiv Berlin-Dahlem) を表し、各文献の所在場所を示している。これらの文庫には、未公刊のものも含めて、シュプランガー (BAK) とベッカー (GSAB) に関する多くの文献が所蔵されている。